

第48回 記者懇談会実施概要

- 1 日時 平成20年5月28日(水) 15時～
- 2 場所 100周年記念会館 第2会議室
- 3 内容

(1) 研究発表・質疑応答 (15:00～16:00)

・^{やまぐち}山口 ^{まこと}誠 社会学部准教授

発表テーマ「記憶はリスクか？」

『グアムと日本人 戦争を埋め立てた楽園』(岩波新書)を著して

・^{みやざき}宮崎 ^しひろ志 環境都市工学部専任講師

発表テーマ「関西大学でのヒートアイランド調査研究

ーこの暑いのとかならへんの！ー」

(2) 学内状況説明・情報交換 (16:00～16:30)

- ① 薬物事件再発防止対策本部の設置と取り組みについて [資料3](#)
- ② 中国四川省大地震及びミャンマーサイクロンに伴う支援活動について [資料4](#)
- ③ 高松塚古墳壁画再現展示室竣工記念 関西大学博物館講演会「高松塚古墳壁画を探る」の開催について [資料5](#)
- ④ 関西大学東京センター公開講座「飛鳥を考える」の開催について [資料6](#)
- ⑤ 関西大学グローバルCOE文化交渉学教育研究拠点による韓国国立慶尚大学校および国立全北大学校との学術交流協定の締結について [資料7](#)
- ⑥ ECOキャンパスへの取り組みについて [資料8](#)
- ⑦ 関大生の活躍について [資料9](#)

4 大学側出席者

河田悌一学長、芝井敬司副学長、良永康平学長補佐、川原哲夫学長課長

山口誠社会学部准教授、宮崎ひろ志環境都市工学部専任講師、吾妻重二文学部教授

藤本清高広報室長、木田勝也広報課長 他

5 参考資料

- (1) 学長メッセージ
- (2) ソシオネットワーク戦略公開講座 ポスター
- (3) 経済・政治研究所 第181回公開講座「国際企業の価値経営」チラシ
- (4) 人権問題研究室 第54回公開講座「朝鮮総督府の『国語常用』運動」チラシ
- (5) ピア活動第1弾 「下宿生のための料理教室」チラシ

以上

記憶はリスクか？

『グアムと日本人 戦争を埋め立てた楽園』（岩波新書）を著して

社会学部准教授 山口 誠 (makoto@senri.st)

【概要】

日本人は忘れつつあるが、グアムはかつて日本の領土だった。島名は「大宮島」。現在のグアムでは、「大宮島」時代の記憶をめぐる再活性化が始まっている。

2006年5月、沖縄に駐留する米軍海兵隊とその基地が、2014年までに米領グアムへ移設される米軍再編計画が発表された。その「基地移転」報道から一年後の2007年5月、米国連邦議会下院ではグアムの歴史に関する重要な法案が可決された。H.R. 1595: Guam World War II Loyalty Recognition Act と名付けられた同法案は、第二次世界大戦において日本軍に占領されたグアムの住民に対し、彼らの米国に対する「忠誠心」を再確認して顕彰し、日本軍によって殺傷被害を受けた住民とその遺族へ補償金を支給することを主眼としている。(賛成 288 票、反対 133 票、現在、上院で審議中。)

グアムと米国では「大宮島」の記憶が再活性化されていく一方で、日本ではグアムへの関心は極めて低い。多くの日本人が「グアム」の名は知っていても、その先住民の名も、日本が2年8ヶ月にわたって「大宮島」として占領し、多くの住民を殺傷した歴史も、そして現在のグアム観光客の約8割を日本人が占めている現状も、知らない。

この二つの社会に横たわる「記憶のギャップ」が、「基地移転」においてリスク要因となっている。グアムでは近年、「大宮島」の記憶を再活性化するイベントが増え、現地紙 The Pacific Daily News も歴史に関する記述を増やしている。いわば記憶がリスク化している。しかし国際関係において記憶は常にリスクでしかないのだろうか。拙著『グアムと日本人』（岩波新書、2007年）をもとに、日本人の記憶の現状を再考し、持続可能で友好的な合意形成における記憶の役割と可能性について考えたい。

【プロフィール】

1974年東京都生まれ。関西大学社会学部准教授。専門はメディア研究、歴史社会学。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程退学。博士（社会情報学）。著書に『英語講座の誕生』（講談社選書メチエ、2001年）、共著に『メディア文化の権力作用』（せりか書房、2002年）、『カルチュラル・スタディーズ』（講談社選書メチエ、2001年）などがある。現在はグアムでのフィールドワークを継続しつつ、「るるぶ」や「地球の歩き方」などが生み出した「商品化された旅」の形を抜け出て、異なる異文化体験と他者との出会いを可能にする新たな観光メディアの実現（新しいガイドブックなどの開発）を目指して研究中。

関西大学でのヒートアイランド調査研究 — この暑いのとかならへんの！ —

環境都市工学部建築学科 専任講師 宮崎ひろ志

【概要】

海風で夕涼みのできる大阪 —2007年8月淀屋橋温熱実測調査より

気候形成における海と陸との結びつきは強い。近年ヒートアイランド現象の緩和策として海風に注目する研究が見られる。海風を利用した暑熱気候の緩和とは、大阪の生活感覚で言い換えれば「夕涼みが可能か」というテーマとなるであろう。

昨年度、大阪の夕涼み文化について基礎的な文献調査を行った。例えば上方落語「舟弁慶」「遊山船」は大川での夕涼みが舞台となっていることが分かった。また大川難波橋周辺等では「納涼」と冠されたイベントも数多く見られた。堀が埋められかつての面影は少なくなったが八百八橋と言われた大坂では橋上での夕涼みが一般的であったことが分かった。

2007年8月淀屋橋橋上での夕涼み可能性について温熱実測調査を行った。本町業務地区との比較測定、寒暑感の数値指標評価の結果、河川を遡上する海風により日没後淀屋橋橋上では夕涼みに適した環境となることがわかった。今回の調査は簡易なものであったが大阪の夕涼み文化を継承できる都市・建築デザインにより、エネルギーを削減できるエコ納涼都市大阪が実現可能であることが示唆されたものと考えている。

都市の「浜風対策」—小学校百葉箱調査より

甲子園球場名物「浜風」は大阪平野全域に見られる海風の別称である。海風は日射の強い夏季日中に発達する。この海風が阪神、泉州では海岸線と平行に吹くため浜風と呼ばれている。2003年より神戸市の小学校の百葉箱に温度センサを設置し、気温分布調査、浜風が夏季の気温に及ぼす影響調査を行っている。これより浜風により気温が低下する垂水区、須磨区等、風上側市街地と、逆に浜風により気温が上昇する灘区、東灘区等風下市街地があることがわかった。つまりヒートアイランドの熱気が海風により吹き流されている状況が見られた。2007年からは大和川周辺で測定を開始。同様の影響を確認した。2008年からは淀川流域に測定点を拡げて海風風下への影響評価を行う予定である。

熱くなる瀬戸内海と大阪のこれから — 昨年度特別研究(卒業研究)より

上記に示すように大阪の都市環境には海風が大きな影響と、可能性を持っていることが分かった。ところが国土交通省の総合水質調査データ(1982~2006)を解析したところ、瀬戸内海海水温が急速に上昇していることが判明し、海風を介して都市気候にも大きな影響を与えかねないことが分かってきた。瀬戸内海の海水温上昇は海域により異なり、季節別の考察では上昇が見られない海域(広島湾夏季)もあったが、上昇スピードの大きい海域では100年に10℃というスピードで高温化しているものもあった(燧灘冬季)。これらの原因は不明であるが、今後調査を行っていく予定である。

大阪はいにしえより海に面した都市として生まれ、繁栄してきた。今後現在の都市の気候だけではなく、海の環境にも目を向けた環境都市づくりを支援する研究教育活動を展開していきたい。

【プロフィール】

1959年兵庫県神戸市生まれ。専門：建築環境工学、都市環境計画学。ヒートアイランド緩和策について緑地計画の観点から研究。リモートセンシング、GIS。博士(工学)。著書：『都市環境のクマトラス—気候情報を活かした都市づくり』、ぎょうせい(共著)、『建築と都市の緑化計画』、彰国者(共著)